

ハプニングから恵み！

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」  
(ローマ人への手紙 8 章 28 節)

トラベルにはトラブル。人生という旅路には何かとハプニングが付き物です。ただ、私たちの信ずる主なる神様は、そんなハプニングから素晴らしい恵みをも産み出して下さいます。あなたのハプニングからも素敵な恵みが生まれると良いですね！

この時期、よく耳にするクリスマス讃美歌の名曲「きよしこの夜」。この讃美歌は、オーストリアはザルツブルク近郊のオーベルンドルフという小さな町の教会で起きたハプニングを機に生まれました。1818 年のクリスマス直前、その教会の足踏みオルガンの空気袋がネズミにかじられて大きく損傷。オルガンが使えずにイヴ礼拝の開催がピンチになったそうです。(※その点、キリストの教会の無楽器礼拝は問題なし!?)

そこで、その教会の助祭ヨーゼフ・モアが書き溜めていた詩に、オルガニストのフランツ・グルーバーがほぼ即興で曲を付けて、当日はギター伴奏で歌われたと言われているのが「きよしこの夜」なのです。[⇒所説ありますが・・・]

ちなみに、第一次世界大戦中のイヴの夜、ある平原で対峙していたイギリス軍とドイツ軍。イギリス軍の一兵士が英語で「きよしこの夜」を口ずさんだところ、期せずしてイギリス軍での大合唱となり、それを漏れ聞いた反対側のドイツ軍が応戦するかのように本場のドイツ語で歌い返しました。そこに東の間のクリスマス休戦が樹立したのです。「きよしこの夜」が巻き起こした嬉しいハプニングですね。

イエス様の“二刀流”!?

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。…」

(ヨハネの福音書1章14節)

つい先日、広島カープのレジェンド、ゲイル・ホブキンス氏とお会いしました。ちょうど私がオンラインで「秋季合同礼拝」の交わりの司会をしていたところでしたので、お願いして皆さんにあいさつもしていただきました。そんなホブキンス氏はメジャー経験もある野球選手であり、引退後は医者として働き、最後はキリストの教会の「オハイオ・バレー大学」の理事長も務められました。ちなみに、野球選手時代からその選手生命の短さを意識して、医学の道に進むことを考え、備えていたそうです。ある意味、野球選手と医者という、本物の「二刀流」なのではないでしょうか?(ちなみに、野球(投打)の二刀流は、高校野球までは決して珍しいことではありません。)

微妙な表現かもしれませんが、私たちの救い主、主イエス・キリストはある意味、神であり、人となられたお方として、究極の「二刀流」をされたのではないのでしょうか?上掲のみことばは、人呼んで「ヨハネのクリスマス」。ヨハネは、キリスト降誕の背後には、神が人となるという「神の受肉」という出来事があることを説明しています。また、パウロによれば「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられ」(ピリピ人への手紙2章6〜7節)たというのです。

ところで、なぜ、主イエス(=神)は、神でありながら、人となるという、究極の「二刀流」に踏み切られたのでしょうか?それはひとえに私たちの苦悩を理解し、私たちの負いきれない重荷を代わりに負い、贖いの十字架に架かって下さるためなのです。

## 神の時(カイロス)を待ち望む

「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。・・・神のなさることは、すべて時にかなって美しい。・・・」

(伝道者の書3章1、11節)

いわゆる教会暦によれば、今年(2025年)は本日(11/30)から“待降節(アドヴェント)”の期間に入ります。なお、“待降節(アドヴェント)”とは、読んで字の如く、降誕祭(クリスマス)を待つ季節のことです。ある意味、この時期、神の御子キリストの降誕を覚える“クリスマス”に備えましょうという訳です。

もちろん、待ち望むことは大切なことですが、何を待ち望むかが大事なのではないのでしょうか？ちなみに、「待降節」を意味する“アドヴェント”とは、本来、ラテン語で「到来」を意味します。ただ、キリストは2000年前に到来していますので、厳密に言えば、私たちが待ち望むべきは再臨のキリストであり、さらに言えば私たちの心へのキリストの到来、つまり主なる神の働かれる<神の時>なのではないのでしょうか？

ちなみに、ギリシア語では“時”を意味する言葉が少なくとも二つあります。一つは“クロノス”で、「時間(=time)」という意味合いです。英語“クロック(=時計)”の語源になっています。過去から現在を通して未来へと水平に流れる時と言えましょう。

それに対して、もう一つが“カイロス”です。これは、言うなれば、要所要所で垂直に降りてくる神の定めし時というイメージです。英語の“chance”、“opportunity”(=機会)というニュアンスでしょうか？

さあ、あなたの人生というクロノス(=時間)に降りてくるカイロス(=神の時)をこそ、しっかりと待ち望みましょう。砕かれた心(謙虚な姿勢)をもって・・・。

海で塩漬けにならない活きた魚のように

「この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。」

(ローマ人への手紙 12 章 2 節)

私たちキリスト者が、主が言われるように「地の塩」、「世(界)の光」として生きていくためには一体、どうしたらいいのでしょうか？その秘訣の一つは、この世にあってもこの世に染まらない生き方することなのではないかと思います。

海の中の魚たちは、塩分濃度の濃い海水の中に棲んでいても、決して塩漬けにはなりません。現に、釣り上げたばかりの魚を真水で洗って、さばいて刺身にしたらどうでしょうか？その切り身に塩味はしません。しかし、もし、その切り身を海水にさらしたらどうでしょうか？忽ち、塩味になるのです。すなわち、魚たちは生きている限り、海水の塩分に染まることはないのですが、死んだらその限りではありません。

同じように、私たちキリスト者もこの世にあって、キリスト者として靈的に生き活きと信仰に生きるのであれば、この世に染まってしまうことはないのです。しかしながら、信仰的、靈的に死んでしまう時には、染まってしまうかもしれません。

そうならないためにも私たちキリスト者は常にこの世にあって神を見上げて参りましょう。ちなみに、新約聖書の原語ギリシア語で「人間」を“アンスローボス”と表現しますが、それは元来「上を向く者」という意味です。ゆえに涙がこぼれない為ではなく、神を見上げる為にこそ、上を向いて歩きましょう！なお、上を向く(=神を見上げる)ためには、日々のディボーションや礼拝、主にある交わりが欠かせません。

祈って、信じて、行動する者に！

「だからあなたがたに言うのです。祈って求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。」

(マルコの福音書 11 章 24 節)

本日、11 月 16 日は、茨城キリスト教学園の創立記念日です。今から 78 年前の 1947 年の今日、シオンの丘に立つ創立者たちは祈りをささげ(下の写真)、それがキリスト教主義学校としての「シオン学園」(後の「茨城キリスト教学園」)の“産声”となりました。戦後わずか二年後のことでした。



“キリストの教会”の宣教師や日本人クリスチャンを含む創立者たちは、まず祈って、信じて、行動したのです。なお、上の写真の反対側(手前)には、数百人の支援者たちがいました。まさに、学園は多くの兄弟姉妹たちの祈りのうちに始まったのです。ちなみに、学園は現在、こども園、中高、大学(院)を擁する総合学園となりました。

「雨乞いの祈りをした農夫は畑に傘を持って行かない」という言葉があります。信じていないからです。ぜひ、私たちは、祈って、信じて、行動する者となりましょう！

## 引き出して下さるお方

そのとき、イエスは彼女に答えて言われた。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。その願いどおりになるように。」すると、彼女の娘はその時から直った。  
(マタイの福音書 15 章 28 節)

マタイの福音書 15 章 21 節以下には、悪霊にとりつかれた娘を癒していただくべく主イエスのもとに大胆にも願い出たカナンの女性のエピソードが記されています。ただ、その切実さとは裏腹に、主イエスは何とも冷たい対応をしています。門前払いとともとれる最初の沈黙(23 節)。そして、二度目のユダヤ人優先発言(24 節)、さらに、三度目の異邦人蔑視発言(26 節)。なぜ、主イエスはそんな仕打ちをされたのでしょうか？

「教育」を意味する英語 “Education”。そんな “Education” は元来、“e”(=外へ)+ “duce”(=導く)、“つまり「引き出す」を意味していた可能性があるのです。すなわち、教育とは悪い意味でのかつての日本の教育のように「詰め込む」ものではなく、その人から良いものを「引き出す」ことだということではないのでしょうか？ある意味、主イエスの不可解ともとれる、この女性に対する三度に渡る冷淡な言動はこの女性から良きもの、つまり、立派な信仰を引き出そうとした結果なのかもしれません。

ところで、最後に主イエスは女性の娘を癒しただけでなく、真の教育者らしく生徒を褒めることを決して忘れません。「ああ、あなたの信仰はりっぱです。」(28 節)と。ちなみに、ここで「立派」と訳されている原語のギリシア語は“メガス”であり、それは「メガトン級」や「メガマック」の「メガ」なのです。「とてつもなく大きい」という意味です。いと小さき異邦人女性から、主は偉大な信仰を引き出されたのです！

「鹿のように」とは？

「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。

私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」（詩篇 42 篇 1 節）

皆さんは「川」に関して、どのようなイメージをお持ちでしょうか？おそらく多くの方は、美空ひばりさんの名曲「川の流れのように」のように、水が悠々と流れていることをイメージすることと思います。

ところが、聖書の世界、パレスチナでは、必ずしもそうとは限りません。なんとヨブ記 6 章 15 節には「私の兄弟たちは川のように裏切った。」とありますように、そこでは「川」が裏切り者の代名詞にさえなっているのです。

実は、パレスチナにおいては、川には常時、水が豊かに流れている訳ではありません。雨季には水が流れますが、乾季には一切水が流れない、水無し川、いわゆる涸れ川(ワディ)というものが存在するのです。

そのような聖書地理に関する知識を動員して上掲の箇所を読み直してみる時、少し違った状況が見えてくるのではないのでしょうか？同じ箇所を新共同訳聖書は次のように訳しています。「涸れた谷に鹿が水を求めるように、神よ、わたしの魂はあなたを求める。神に、命の神に、わたしの魂は渴く。」

このことから分かりますように、この詩に登場する鹿は、潤沢な谷川の流れに水を求めているのではなく、むしろ、乾季で干上がってしまった水無し川、涸れた谷において、必死に川底を口先で叩きつつ水を求めているのです。そこにあるのは、清涼感や余裕ではなく、むしろ、荒涼感と切実さなのです。

終着駅は始発駅 ～天望して今を生きる～

「まことに、あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り、夜回りのひとときのようにです。」  
(詩篇 90 篇 4 節)

私たちがその人生を歩む上で大切な二つのスタンス(姿勢)。その一つが前回観た、<この地上生涯には限りがある>というスタンス。そして、もう一つが<死は決して終わりではない>というスタンスです。

上掲の「あなたの目には、千年も、きのうのように過ぎ去り・・・」もそうですし、ペテロの手紙第二 3 章 8 節の「・・・主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。」でも明確に述べられておりますように、神のスケールは私たちの想像を絶するものなのです。それは、前回述べましたような、地上における人間の有限性とは真逆の、驚くべき神の永遠無限性なのです。

そして、何と、私たちキリスト者においては、主イエス・キリストの十字架と復活を通して与えられる救いの恵みによって、その有限性に神の無限性が豊かに働くのです。主イエスは言われました。「・・・わたしは、よみがえります。いのちです。私を信じる者は、死んでも生きるのです。」(ヨハネの福音書 11 章 25 節)と。

「終着駅は始発駅」・・・私たちキリスト者の地上生涯の終着駅である“死”は、永遠のいのちへの始発駅でもあるのです。それゆえに、死は決して「希望なき終わり(Hopeless End)」ではなく、まさに「終わりなき希望(Endless Hope)」なのです。そんな永遠のいのちへの希望、復活信仰によって、私たちキリスト者は今、《天望》しつつ「良い港があるからこそ、冒険的な航海に出ることができる」と言えるのです！



終わりから今を見る ～自分の日を数えつつ～

「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。・・・どうか教えてください。自分の日を数えることを。・・・」  
(詩篇 90 篇 10～12 節)

私たちがその人生を歩む上で大切なスタンス(姿勢)が二つあるように思います。一つは<この地上生涯には限りがある>というスタンスです。[もう一つは次週述べたいと思います。]

さて、上掲の詩篇でモーセはこう述べています。「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。・・・どうか教えてください。自分の日を数えることを。・・・」と。彼は百二十歳にして「目はかすまず、気力も衰えていなかった」そうですが、それでもなお、自分自身の人生の限界、地上生涯には限りがあることを実感していたようです。クリスチャン医師の日野原重明氏は「いのちは時間である」とも言っています。

ところで、中世の修道士たちは、互いにラテン語で“メメント・モリ([汝の]死を覚えよ)”という言葉を投稿かけ合っていました。この地上生涯は有限なのだから、その終わり、すなわち、死というものを積極的な意味で意識して、与えられている生をより濃く、有意義に生きていこう、ということだったのではないのでしょうか？ある意味、「自分の日を数える」というのは、そういうことなのだと思います。

私が東京神学大学大学院で学んでいた時に、ディサイプルス派出身でもある神学者の大木英夫教授が「終末論とは、終わりから今を見ることだ」と教えてくれました。マラソンが終わりであるゴールから逆算して、今をどのように走るべきかを考えて走るように、という訳です。・・・私たちも“メメント・モリ”、“自分の日を数え”つつ、終わりから“今”を見詰め直して、“今”をこそ主にあって有意義に歩みたいものです！

多く赦された者は多く愛する ～高価な恵み～

「・・・この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから・・・」  
(ルカの福音書 7 章 47 節)

上掲のみことばは、あるパリサイ人の食卓に招かれた際、一人の罪深い女が主イエスの足もとに近寄り、その涙で主の足をぬらし、その髪の毛でそれをぬぐい、最後に持参した石膏の壺に入った香油を塗ったことに対して、主イエスが言った言葉です。

おそらく、その様子を見ていた人々は、なぜ、主イエスは遊女と思しき罪深い女になすがままにさせるのか、と疑問に思ったことでしょう。また、その女性の破格の振る舞いに驚愕したに違いありません。なぜなら、もし、その香油がナルドの香油だったとしたら、それは一壺あたり当時の年収を下らない高価なものだったからです。

そんな驚きを隠せない、パリサイ人はじめ、そこにいた人々に、女性を指し示して主イエスはこう言われたのです。「・・・この人は多くの罪を赦されています。彼女は多く愛したのですから・・・」。この主イエスの言葉(の日本語訳)を、もう少し分かりやすく言い直せば、こうなるでしょう。「彼女は多く赦された(と自覚した)のだから、(それに応答して)多く愛したのだ」と。  
“多く赦された者は多く愛する” のです！

まもなくこの日本でその数奇な半生を描いた映画が公開される、牧師であり、神学者でもあったディートリッヒ・ボンヘッフアー。彼はその著書を通して、「安価な恵みと高価な恵み」という問いを投げ掛けています。すなわち、私たちキリスト者がその救いの恵みに十分、応答していないとしたら、それは結果的にその恵みを安価なものにしてしまっているという訳です。願わくば、私たちキリスト者は、その救いの恵みに正當に大きく応答して、その恵みの“高価”さを大いに証ししたいものです。

何かしよう(Do Something)！ ～神の作品として～

「私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。」

(エペソ人への手紙2章10節)

マシュー・ウェストというクリスチャン・アーティストの「ドウ・サムシング(何かしよう!)」という曲の歌詞はおおよそこんな内容です。「ある朝、私は目を覚ました。気付くと世の中は大変なことになっていた。そして、その状態はますます悪くなっていく一方ではないか？そこで私は向き直り、顔を天に向けて叫んだ。『神様、あなたは一体、何をしていますんですか!』『神様、あなたはなぜ、何もしないで傍観しているだけなのですか?』～しばらくすると、どこからともなく、かすかな声がした。『だから、私はあなたを造ったんだよ』」。

ともすると私たちもこの歌の主人公と同じように、天に向かって叫んでいるのではないのでしょうか？「神様、あなたは一体、何をしていますんですか!」、  
「神様、あなたはなぜ、何もしないで傍観しているだけなのですか?」と。そんな私たちに神様は同様にこう応えられていると思います。「だから、私はあなたを造ったんだよ」。

上掲の聖句で、私たちが“神の作品”であるということの一つの意味は、まさに、マシュー・ウェストの「ドウ・サムシング」にも歌われておりますように、この問題の絶えない世の中であって、救いを恵み、賜物としていただいている私たちが、それに応答しつつ与えられている命をはじめとする様々な賜物を生かして、ドウ・サムシング、すなわち、何かをするということなのではないのでしょうか？私たちは、まさに主にお入用とされて、何かをすることが期待されている神の作品(=傑作)なのです！

すべてはプロセス ～終着駅は始発駅～

「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。』」（ヨハネの福音書 11 章 25 節）

最初に、なぞなぞです。季節が秋⇒夏⇒春⇒冬という順番で巡ってくる場所は一体、どこでしょうか？…正解は「辞書の中」です。辞書の中では、季節は五十音順に巡ってくるという訳です。※ 英語圏ではアルファベットの関係で秋⇒春⇒夏⇒冬になります。

春夏秋冬。夏の終わりは秋の始まり……。そんな季節の移ろい(変化)を神に感謝します。国や地域によっては“常夏”という所もありますが、それでも乾季と雨季の入れ替わりはあるでしょう。つまり、ずっと同じ状態ということはないようです。

変化は季節に限りません。大きな挫折は次の成功へのステップになり得るのであり、失恋は新たな出会いへの布石ともなり得るのではないのでしょうか？すべてはプロセスであり、そのあとがあるのです。神は“そのあと”を備えて下さっています。

それだけではありません。なんとキリストを信じる者にとって、死も決して終わりではなく、それはプロセスであり、そのあとがあるのです。「終着駅は始発駅」。私たちの地上生涯の終わりである死は、決して一巻の終わりではなく、永遠のいのち、天の御国での歩みの始まりでもあるのです。

震災後に詩人・谷川俊太郎が紡ぎ出した以下の詩は、信仰的な視点、また、復活という観点からも読み直すことができるのではないのでしょうか？

「そのあと」

そのあとがある。大切なひとを失ったあと、もうあとはないと思ったあと、すべて終わったと知ったあとにも、終わらないそのあとがある。・・・[前半のみ抜粋]

## 人生の秋に

「年老いて、しらがになっても、神よ、私を捨てないでください。私はなおも、あなたの力を次の世代に、あなたの大能のわざを、後に来るすべての者に告げ知らせます。」  
(詩篇 71 篇 18 節)

わずかながらも朝夕の涼しさに秋を感じられるようになり、感謝です。願わくは、そんな実りの秋を「祈りの秋」にして、豊かに霊的な結実をいただきたいものです。もしかしたら、“人生の秋”を感じている方もいらっしゃるかもしれません。そんな貴方も、その“人生の秋”を、後続の者へのとりなしの「祈りの秋」にしてみてもはいかがでしょうか？以下に、著書『人生の秋に』で、H. ホイヴェルス神父が紹介している作者不詳の詩を紹介します。

### 最上のわざ

この世の最上のわざは何？楽しい心で年をとり、働きたいけれど休み、しゃべりたいけれども黙り、失望しそうな時に希望し、従順に、平静に、己の十字架を担う。若者が元気いっぱい神の道を歩むのを見ても、妬まず、人の為に働くよりも、謙虚に人の世話になり、弱って、もはや人の為に役だたずとも、親切で柔和であること。老いの重荷は神の賜物、古びた心に、これで最後の磨きをかける。まことの故郷へ行く為に。己をこの世に繋ぐ鎖を少しずつ外していくのは、真にえらい仕事。こうして何もできなくなれば、それを謙虚に承諾するのだ。神は最後に一番良い仕事を残して下さる。それは祈りだ。手は何もできない。けれども最後まで合掌できる。愛する全ての人の上に、神の恵みを求める為に。全てを為し終えたら、臨終の床に神の声を聴くだろう。『来よ、我が友、我汝を見捨てじ』と。

憧れるのをやめましょう

「ここ(ベレヤ)のユダヤ人たちは、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」

(使徒の働き 17 章 11 節)

「憧れるのをやめましょう」とは、大谷翔平選手が 2023 年の WBC(野球の世界大会)決勝で、強豪アメリカ戦の直前にロッカールームでの声出しの際に発した言葉です。後に名言と言われるようになりました。

メジャーリーグのトップスターである相手選手に対し、憧れてしまっただけは、決して彼らを越えられない、勝つためには少なくとも今日だけは憧れを捨てて戦うことに集中しよう、という意味で、日本チーム「侍ジャパン」の士気を高める意味が込められていました。

「憧れるのをやめましょう」。この言葉は別な意味で、もしかしたら私たちキリスト者にも必要な言葉なのかもしれません。なぜなら、私たちはともすると、宣教師や先人たちの言動や伝道者のメッセージを無批判に鵜呑みにしてしまうことがあるからです。

私たちキリスト者には、時に、上掲のみことばにあるベレヤのユダヤ人たちのように「はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べるからこそが求められているのではないのでしょうか？」

私たち“キリストの教会”のあり方に関しましても、先人たちが何を言っているか以上に、そもそも聖書が何と言っているのか、キリストが何を望まれ、喜ばれるかを、積極的な意味で再吟味して参りたいと思います。

あなたも感謝探しの達人に！

「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

(テサロニケ人への手紙第一 5 章 18 節)

今年(2025 年)も残すところあと四ヶ月です。早くも、一年の三分の二が経過したことになりますので、この辺りで、改めまして、今年のテーマ「感謝」について考えてみたいと思います。

ドイツの哲学者マルティン・ハイデッガーは、「考える」を意味するドイツ語“denken”と「感謝する」を意味するドイツ語“danken”は語源が同じであるがゆえに、よ～く「考える」時に「感謝する」思いが沸々と湧き上がるのだと指摘しています。英語の“think”(考える)と“thank”(感謝する)にも同じことが言えましょう。

英国の著名な牧師であり作家でもあったマシュー・ヘンリー[1662-1714 年]は、「感謝探しの達人」の異名を取ります。初めて強盗に遭い、金銭を盗まれてしまった日の日記に、ヘンリーは強盗に遭いながらも感謝すべき四つの理由を書き記しています。

第一に、これまで自分は強盗に遭ったことがなかったことを感謝しよう。

第二に、お金は奪われたが、命までは奪われなかったことを感謝しよう。

第三に、奪われたのはあの時の所持金で、全財産ではなかったことに感謝しよう。

第四に、私はお金を盗まれた方で、盗んだ方ではなかったことに感謝しよう。

このように考えてみますならば、私たちの周囲には感謝すべきことがいくらかでも隠されているのではないのでしょうか？ぜひ、マシュー・ヘンリーのよう「感謝探しの達人」になりたいものです。・・・一見マイナスとも思えるような中にも、感謝できるプラスを、それこそ、宝探しのよう掘り起こしたいと思います。さあ！

困難な時こそ、遠くを見よう！

～終わりは新しい始まり～

「わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。初めであり、終わりである。」  
(ヨハネの黙示録 22 章 13 節)

本日 8 月 31 日は、学校に通っている皆さんにとっては、とても残念な日かもしれません。というのも、多くの場合、この日で楽しくて長かった夏休みが終わってしまうからです。正直、私も小中学生の頃は、この日(=夏休み最終日)が「人生最悪の日」でした。まさに、“終わった”と思えたものです。

しかしながら、少しずつ成長する中で、徐々に、その先があることに気づいていきました。そう、目の前の夏休みが終わっても、やがて、冬休みが来ることが分かったのです。さらに、春休みが、そして、翌年の夏休みもやって来るではありませんか？

105 歳で召天されたクリスチャン医師・日野原重明先生はその最後の著書でこう述べています。「困難な時こそ、遠くを見よう！」と。確かに、夏休みが終わってしまっても、少し遠くを見れば、冬休みが、やがて、春休みが、そして、翌年の夏休みも見えてくるのです。まさに、明日(9/1)から次の休みへのカウントダウンが始まるのです。

そして、学校が苦手だった私は、クリスチャンになって、ついに、決して終わることのない永遠の夏休み、すなわち、天の御国があることに気づきました。しかも、それは誰もが“終わった”としか思えないような死の後に続くのです。

死は終わりではありません。・・・死という終わりは、イエス・キリストの十字架と復活を通して与えられる救いの恵みによって、まさに、新しい始まりとなるのです。

主は、私たちの残念な終わりを、嬉しい始まりにこそして下さいます。ハレルヤ！



## 狭き門・・・大勢に流されない生き方

「狭い門からはいりなさい。滅びに至る門は大きく、その道は広いからです。そして、そこからはいつて行く者が多いのです。いのちに至る門は小さく、その道は狭く、それを見いだす者はまれです。」

(マタイの福音書 7 章 13～14 節)

先日、亡くなられた茶道裏千家の家元だった千玄室さんは、「特攻の生き残り」としての忸怩たる思いを持ちつつ、茶道を通して平和を訴え続けたそうです。学徒出陣の際には、父親から茶道千家の始祖・千利休が無念のうちに切腹した際に使ったとされる名刀を見せられ、命を大切にせよとの無言のメッセージを受け取ったと言います。

そんな千玄室さんは、その著書の中で、茶室の「躰り口」に触れ、次のように述べているそうです。茶席では、武士や平民の区別なく、みな平等。茶室の入り口が「躰り口」と呼ばれ、狭く低いのは、武將に刀を外させるためだという。そして、千利休がそれを思い付いたのは、上掲のみことばの冒頭「狭い門からはいりなさい」の一節からだという説があるということです。・・・そんなところに、千玄室さんは、茶道と平和の関係を見たのかもしれない。

と同時に、私は思います。戦争中、多くの人々はある意味、「右へ倣え」、「長い物には巻かれろ」と、無批判に大勢に流されてしまったのではないのでしょうか？つまり、広い門から入り、広い道を行ってしまったのです。私もそうしたかもしれません。

しかしながら、主イエスは、言われます。「狭い門からはいりなさい」と。私たちは、時に、自己批判しつつ、それぞれのケースで、みこころならば、主の望む狭い門をくぐり、狭い道を進みたいものです。そこにこそ、主は同伴して下さるからです！

## キャンプする神

「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」  
(ヨハネの福音書1章14節)

夏と言えば、キャンプ！という方も少なくないのではないのでしょうか？・・・私たちキリストの諸教会にも、夏を中心にいくつかのクリスチャン・キャンプが行なわれています。現在、御茶の水では、CS(教会学校)小中学生キャンプを奥多摩のキャンプ場を借りて行なっております。また、コロナ禍前までは、箱根峠で箱根バイブル・キャンプも行なっておりました。

ちなみに、かつては主に東京以西のキリストの諸教会が合同で本栖湖のキャンプ場を使って「本栖クリスチャン・キャンプ」を行なっておりました。ただ、事情により、現在は行なわれておりません。一方で、主に茨城以北地区のキリストの諸教会が合同で、今もなお、日立の山奥のキャンプ場で「日立クリスチャン・キャンプ」を開催し続けています。つい先日(8/11)、その七十周年記念礼拝があり、参加して参りました。

ところで、クリスチャン・キャンプの目的は何でしょうか？・・・もちろん、夏休みなどを利用して集中的にみことばを学んだり、主にある交わりを深めるということもあるでしょう。と同時に、創造主なる神の創造のみわざとしての大自然に触れ、その醍醐味を味わい、その恵みを実体験するということもあるのではないのでしょうか？

上掲のみことばは神の受肉(=神が人となること)を示すみことばです。実は、神が「人となって、私たちの間に住まわれた」の「住まわれた」は、「キャンプした(テントを張った)」という意味もあるのです。神は私たち人間の艱難辛苦を実体験されたのです。

平和をつくる者に！

「平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるから。」

(マタイの福音書 5 章 9 節)

今年 2025 年、日本では戦後 80 年の節目を迎えています。「日本では」と述べましたのは、今もなお戦火の絶えない戦時下の国々や地域があるからです。一刻も早い平和の回復を祈りたいものです。

ところで、「果報は寝て待て」と言われますが、平和は寝て待っていても決して訪れるものではありません。現に、上掲の聖句で主イエスは、私たちがより積極的に平和を「つくる」ことをこそ求めておられます。

ぜひ、(アッシジのフランシスコに帰される)下記の「平和を求める祈り」を黙想しつつ、私たちにでき得る身近なことから、平和をつくることを実践して参りましょう。

### 「平和を求める祈り」

神よ、わたしをあなたの平和の道具としてお使い下さい。憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところにゆるしを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらす者として下さい。慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠のいのちをいただくのですから。

喜んで主に仕えるとは？

「喜びをもって主に仕えよ。喜び歌いつつ御前に来たれ。」（詩篇 100 篇 2 節）

まだ奴隷制が盛んであった頃、一人の女奴隷が競売にかけられました。売主は、なんとかその奴隷を高く売ろうと、美味しいものを食べさせ、美しく化粧も施しました。

いよいよ競売の日、彼女を買い求めるせりが始まりました。何十ドルから始まって、何百ドル、何千ドル、彼女の値は一気にせり上がりました。彼女の値が跳ね上がることに比例して、女奴隷の緊張と恐怖はうなぎ登りに増していくのでした。これだけ高い値が付けられたのだから、何をさせられるか分からない・・・。

その恐怖が最高潮に達した時、強面の男が、誰もが到底太刀打ちできないような高額を叫んだのです。彼女は目の前が真っ暗になりました。すると、すぐその後で、その金額にさらに上積みした高額が一人の紳士によって叫ばれたのです。「5 千 5 百ドル!」。その後、その場には静寂が垂れ込め、やがて競売人が競り落としを決定すべく、木槌を打ち鳴らしました。女性の奴隷は、その紳士によって買い取られたのです。

彼女は恐怖と緊張のさ中、その紳士の元へと連れて行かれました。何をさせられるのか?・・・しかしながら、その紳士は、開口一番、思いも寄らぬことを口にしたのです。「私は奴隷反対論者です。あなたの怯える姿を目の当たりにし、何とかあなたを助け出したい、解放したいと思いました。そのために、私の全財産を投げ打って、あなたを買い取ったのです。さあ、あなたは今日、この時から、自由です。お好きなところへお行きなさい。」。それを聞いた女性の奴隷は驚きつつも、やがて、その意味を理解し、号泣したのです。そして、言いました。「私は一生、あなたに仕えます!」。

私たちキリスト者も、罪の奴隷から解放されるべく、主によって贖われたのです!

この少年のように、私たちは主なる神に信頼しよう！

「心を尽くして主に抛り頼め。自分の悟りにたよるな。あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」

(箴言 3 章 5～6 節)

名を上げた綱渡り師が故郷に錦を飾るべく、ふるさとの峡谷で綱を張り、綱渡りを披露しました。観客はその綱渡り師に絶対の信頼を寄せ、成功を確信しています。

そんな中、いよいよ綱渡りが始まりました。風で綱は揺れましたが、綱渡り師は全く動じることなく、向こうの崖からこちらの崖へと綱渡りを成功させたのです。「世界一!」、「アンコール!」という声も上がりました。

そこで綱渡り師はそれらの歓声に応えて、もう一度、向こうの崖へと戻ることにしたのです。その際、彼は観衆に聞きました。「皆さん、私を信じてくれますか?」。観衆は応えます。「もちろんだ!」、「心から〜」。・・・一瞬の間を置いて、彼は続けました。「では、今度は誰か私の肩に乗ってくれませんか?安全に向こうまで送り届けます!」。すると先程までの歓声が嘘のように静まり、誰も応答する人はいませんでした。

ところが、しばらくして一人の少年が「じゃ、僕が乗るよ!」と言って、綱渡り師の方にポンと乗ったのです。やがて綱渡り師は、その少年を肩に乗せたまま綱渡りを完璧に成功させたのです。大きな拍手が湧き起こりました。そして、今度の拍手喝采は、綱渡りの名人に対するものではなく、一人の少年の勇気に対してでした。

多くの観客は少年に聞きました。「坊や、怖くなかったのかい?」。少年は答えました。「ぜんぜん。だって、この人、僕のお父ちゃんだもの!」。その少年の指先には、はにかみながら観衆の声援に応える、あの綱渡り師がいたのです。

## 主にある交わりの素晴らしさ

「見よ。兄弟たちが一つになって共に住むことは、なんというしあわせ、なんという楽しさであろう。（詩篇 133 篇 1 節） ※「住む」は「座る」とも訳し得る言葉

上掲の聖句は、詩篇 133 篇の表題「都上りの歌。ダビデによる」に基づけば、イスラエルの十二部族がシオン(エルサレム)で和合して、共に礼拝をささげている場面と捉えることができます。一方で、批評的な聖書学者によれば、登場する用語からソリ背後には捕囚後の状況が伺えるということで、再建されたエルサレムの神殿での再会の喜びをうたったものとも解されることがあるようです。

ただ、いずれにしましても、神の民イスラエルが、主なる神を覚えて、共に集っている場面であることには間違いありません。この聖句を現代の文脈に適用すれば、ある意味、教会における主にある交わりの素晴らしさを指し示していると言っても過言ではないのではないのでしょうか？

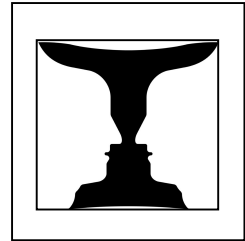
喉元過ぎれば熱さを忘れる、ではありませんが、私たちはつい数年前まで、コロナ禍ゆえに、礼拝のために一堂に会することさえできない時もありました。それを考えれば、今、基本的には、共に相集って、主にある交わりのうちに、主イエス・キリストの十字架と復活を覚えて礼拝をおさげできることは大いなる恵みなのではないのでしょうか？改めまして、主にある交わりの醍醐味を味わいたいと思います。

ところで、教会とは、新約聖書の原語ギリシア語で“エクレシア”。本来、「主なる神によって呼び出された者たち」を意味します。ですから、教会は建物のことではなく、キリスト者の集まりであり、信仰共同体のことなのです。そこでこそ、私たちキリスト者はまず主によって育まれ、そして、互いに助け合い、支え合っていくのです。

私たちは器です！

「私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかにされるためです。」  
(コリント人への手紙第二 4 章 7 節)

さて、最初に右の絵をご覧ください。何に見えますか？(白い部分は)二人の人の顔が向き合っているようにも見えますが、(黒い部分を)よく見ると、洒落た花瓶のようにも見えるのではないのでしょうか？実はこれ、二人の人の顔にも見えるし、花瓶のような器にも見える、いわゆる、だまし絵です。なぜ、この絵をお見せしたか？一見、人の顔のように見えて、実は器。・・・私たちは、まさに、器のような存在なのではないかと言いたいのです。



私たちが普段使っています言葉でも、「あの人は器が小さい」とか、「大器晩成」などというように、人を器で表現いたします。聖書の世界でも、パウロは私たち人間を「土の器」と表現しています。ちなみに、「土の器」は言うなれば土器であり、落としたらすぐに壊れてしまいますように、私たちは肉体的にも、精神的にも、まことに弱い存在なのではないのでしょうか？

そんな弱い器ですが、その中に神の恵みがふんだんに入れられ、満ち溢れる時、私たちの思いを超えて、それは尊く用いられるのです。まさに、神の器として・・・。

あのマルタとマリヤ(ルカ 10:38-42)のマルタは、他人の器に盛り付け、注いでいながら、肝心の自分という器が枯渇していたのです。一方、マリヤは主のみことばを聴くことによって枯渇した自分という器を豊かに満たしていたのではないのでしょうか？

## 礼拝は最上の奉仕

「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」  
(ローマ人への手紙 12 章 1 節)

「礼拝」のことを英語では“サービス(service)”とも言います。これはある意味、礼拝がまず神に仕える奉仕(サービス)であることを意味しているのではないのでしょうか？ですから、「ご職業は？」と聞かれた際に、私は冗談で「サービス業です!？」と答えることがあります。

語弊を恐れないで言えば、まさに、礼拝こそ、最上の奉仕であると言えるのではないのでしょうか？・・・何しろ、礼拝で私たちキリスト者は神に仕えると同時に、主なる神様も礼拝を通して、私たちに働いて下さり、私たちを霊的に満たして下さるからです。そうして、私たちは具体的な奉仕へと出て行くことが可能になるのです。

マルタとマリヤの話(ルカ 10:38-42)を思い出して下さい。姉マルタはある意味、主イエス一行のもてなし(他人の器に料理を盛りつけ、ぶどう酒を注いでいた)という具体的な奉仕に精を出していたのですが、余りに忙し過ぎたのか、自分という器自体が枯渇してしまったようです。その一方で、妹マリヤは、まさに、自分という枯渇した器を満たすべく、主の足元でみことばに聴き入っていたのです。これは霊的な礼拝と言えるかもしれません。

何が出来なくとも、まずは主なる神を礼拝するという最上の奉仕に与りましょう！そうする時に、土の器が満たされて、他の器を満たす奉仕へと用いられ得るのです。



Human-doing ではなく、Human-being なのです！

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。…」

(イザヤ書 43 章 4 節)

いわゆる“十戒”には、安息日についてこう記されています。「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。・・・あなたはどんな仕事もしてはならない。」(出エジプト記 20 章 8 節および 10 節後半) どちらかと言えば、安息日にするべきことではなく、してはいけないことが記されています。

もちろん、旧約聖書の「安息日」では、神を礼拝し、神を覚えるためにこそ、仕事の手を休めるということが求められたものと思われます。そして、それに加え、神の創造のみわざにおける安息になぞらえて、私たち人間も身体を休めるという意味もあったのではないのでしょうか？

かつて、安息日の意義について、次のような説明を聞いたことがあります。すなわち、安息日に人間が何もしてはいけないことの理由の一つは、神の前に人間がまず、何かを「するため」(To Do)の存在ではなく、むしろ、「あるため」(To Be)の存在であることをわきまえる為ではないかということです。なるほどなあ、と思いました。私たち人間は、神の前に、まず、何かを「するため」(To Do)の存在なのではなく、むしろ、「あるため」(To Be)の存在であるという訳です。

確かに、私たち人間は、神の前にあって、何かを「するため」(To Do)の存在として愛されているのではなく、むしろ、「あるため」(To Be)の存在として、「いてくれてありがとう」という意味で、愛されているのではないのでしょうか？・・・だから、私たち人間は、決して Human-doing ではなく、Human-being なのです！

喉の渇きには水を、心の渇きにはみことばを！

「しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。」

(ヨハネの福音書 4 章 14 節)

いよいよ暑い季節がやって参りました。これからは、いわゆる熱中症のリスクが高まりますので、適度な水分補給が欠かせません。

ところで、私たちは、喉も渇きますが、時に、その心(魂)も渇きます。喉の渇きは、水分補給によって癒され、熱中症などを発症するのを防いでくれますが、心(魂)の渇きは決して水分補給では癒されません。そして、心の渇きは、時に、私たちに様々な問題を引き起こします。

例えば、あのマルタとマリヤの話(ルカ 10 章 38～42 節)を思い出して下さい。ある意味、姉マリヤは、主イエス御一行様のおもてなし(接待)のために、身も心も疲弊していたのか、少しイライラしてしまったのかもしれません。その矛先は、何もしないで主イエスの話に聴き入る妹マリヤに向けられたようです。枯渇した器としてのマルタがそこにはいたのです。

その一方で、妹マリヤは、実は、何もしていなかったのではなく、主イエスの足もとに座って、その話(みことば)に耳を傾け、自分自身という器を満たそうとしていたのではないのでしょうか？

私たちも、時に、主の足もとにじつくりと座して、具体的には、日々のデボーションや主日の礼拝等を通して、みことばをいただき、渇いた心を癒され、枯渇した器を満たしていただきたいものです。・・・喉の渇きには水を、心の渇きにはみことばを！

## アンパンマンに見え隠れするキリストの姿

「イエスは言われた。『わたしが命のパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して飢えることはありません。』」

(ヨハネの福音書 6 章 35 節)

現在、NHK の連続テレビ小説で放映されている「あんぱん」は、あの「アンパンマン」の原作者やなせたかしとその妻・小松暢をモデルとしたフィクションです。ちなみに、やなせたかしは聖公会のクリスチャンであったようですが、本人の言動からそうでないという意見もしばしば見受けられます。ある意味、型にはまらない信仰者であったのかもしれませんが。

それはさておき、「アンパンマン」の背景には、明らかな自己犠牲の精神が見て取れます。アンパンマンは自分の頭(アンパン)を食べさせて他者を助けるのです。まさに、上掲のみことばを彷彿とさせるのではないのでしょうか？

また、アンパンマンは、頭が濡れるとダメになってしまったり、弱いイメージを持っています。さらに言えば、その見た目も、必ずしもカッコ良くて強いヒーローではないのではないのでしょうか？

私たちの究極のヒーロー、いや、救い主イエス・キリストにも、カッコ良くて強いイメージはありません。むしろ、一見、弱々しく見えるのではないのでしょうか？・・・イザヤはその姿を預言的にこう描写しています。「彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもしない」(イザヤ 53:2b)と。

しかしながら、そんなキリストが「私たちの病を負い、私たちの痛みをになっ」(同 53:4a)て、贖いの死と復活を通して、私たちに真の救いをもたらして下さったのです！

## 最も身近な神としての聖霊

「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。」

(コリント人への手紙第一 6 章 19 節)

参考までに述べるのですが、私たち(キリストの諸教会)が必ずしもとらわれてはいない、いわゆる教会暦には、「三大祝祭日」というものがあります。降誕祭(クリスマス)と復活祭(イースター)はすぐに分かりますが、残りのもう一つは「聖霊降臨日(ペンテコステ)」です。聖書によれば、聖霊が降臨して教会が誕生したことから、この日は“教会の誕生日”とも言われたりします。

ところで、「聖霊」とは、「父」「子」と並んで、“三位一体”の神の一位格として、極めて大切な存在であられる訳ですが、私たち(キリストの諸教会)では、歴史的なこともあり、あまり積極的には語られて来なかったという経緯があります。もちろん、現在はそんなことはありませんが、なかなか理解し難いのが「聖霊」でしょう。

ただ、仮に、旧約の時代を父なる神の時代、新約、ことに福音書の時代を子なる神キリストの時代と捉えるなら、今、現代はまさに「聖霊」の時代と言えましょう。そして、そんな「聖霊」なる神は、距離感で言えば、最も身近な存在だと言えるのです。

どういうことでしょうか?・・・距離感で言えば、旧約時代の父なる神は、イスラエルの民を天から見守り、導かれるイメージです(God is above us)。そして、新約、ことに福音書の時代の子なる神キリストは、実際に人となられた神として、弟子たちと共に歩まれ、働かれました(God is with us)。それらに対して、現在、聖霊なる神は、私たちキリスト者一人一人に臨在し、内住して下さるのです(God is in us)！

梅雨空に、秘められしかな、汝が恵み

「悲しみは笑いにまさる。顔の曇りによって心は良くなる。」

(伝道者の書7章3節)

ある方は言いました。「涙を流したり、悲しむこと以上に悲惨なことは何か？それは、涙を流すことができず、悲しむことさえできないことである。」。確かに、そういう面があるのではないのでしょうか？ある意味、共に悲しんで下さるお方の前で思いっきり涙を流したり、顔を曇らせることができるのは、幸いなことなのかもしれません。つまり、共に涙を流して下さる主の前で分かち合う悲しみは人の前での笑いにまさり、全てを理解して下さっている神の前で顔を曇らせることは私たちの心の解放や心の回復につながっていくということなのではないのでしょうか？「涙こそ、主が理解して下さる言語です」という言葉もあるのです。

「梅雨空に、秘められしかな、汝が恵み」良哉(りょうさい)。・・・恥かしながら、かつて御茶の水キリストの教会の俳句会の末席に名を連ねた俳句会系クリスチャンの私(野口)が「良哉(りょうさい)」との俳号で投句したものです。

かつて、今にも泣き出しそうな梅雨空を見ていましたら、雨というものはある意味、自分にとっては極めて不都合である一方、農業を営む誰かには待望の“恵みの雨”かもしれないと思ひ至り、また、そんな雨の恵みは巡り巡って、この私のためにも降り注いでいるのだということに、はっと気付かされた、という次第です。

“Every cloud has a silver lining.”・・・これはあるジャズのナンバーのさびのフレーズですが、その意味するところは「どんな暗雲にも太陽の存在をほのめかす銀色の縁どりがある！」というものです。～あの暗雲、梅雨空の向こうにも太陽が輝いているように、私たちの心の暗雲の背後にも必ずや輝く主の救いや備えがあるのです！

眠れない時は・・・

「主は私の羊飼い。私は、乏しいことはありません。主は私を緑の牧場に伏させ、いこいの水のほとりに伴われます。主は私のたましいを生き返らせ、御名のために、私を義の道に導かれます。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても、私はわざわざいをおそれません。あなたが私とともにおられますから。・・・」（詩篇 23 篇 1～4 節 ab）

あるキリスト者のカウンセラーがこんなことを言っていました。・・・「眠れない時は、羊を数えてはいけません。あなたが羊になりなさい。」と。

つまり、眠れない時に、何とか眠ろうと、よく言われるように、羊を数えたりすることはかえって逆効果になる。むしろ、自らがふかふかの羊のようになって、明け渡して、良き羊飼いであるイエス様の懷にいることをイメージしなさい。そういうことではないでしょうか？

私はつい最近、久しぶりにその話を思い出して、あのマルタとマリヤの話（⇒ルカの福音書 10 章 38～42 節）が頭に浮かんだのです。つまり、「羊(の数)を数える」ということは、羊飼いのすることです。羊たち(=他者)のお世話をする働きと言い換えてもいいでしょう。ある意味、マルタはまさに羊飼いのように、他者のおもてなしに精を出していました。しかしながら、それゆえに精魂尽き果て疲れ果てていたのです。一方で、マリヤは真の羊飼いである主イエスの足もと(=イメージとしてはその懷)で、まさに羊のように養われていたのではないのでしょうか？

私たちは時に、羊飼いの働きを休んで、まずは良い羊飼い、究極の羊飼いであられる主イエスの懷で癒され、その「たましいを生き返らせ」ていただくことが必要なのではないのでしょうか？疲れしている時は、羊飼いの仕事を休んで、羊になりましょう！

「弱さの知」～靈的“弱音”としての祈りを！～

「しかし、主は、『わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。』と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」

(コリント人への手紙第二 12 章 9 節)

哲学者のソクラテスは、「無知の知」ということを言ったそうです。自分が無知であることを知っている「無知の知」は、自分が無知であることさえ知らない「無知の無知」よりは優れているということではないでしょうか？

そんな「無知の知」になぞらえて言えば、私たちには時に、自分の弱さを弁え知る「弱さの知」こそ、必要なのではないのでしょうか？そして、自分の無力さ・弱さを実感して、神を見上げていく時、そこに、神は力強く働いて下さるのです。

“Men’s Extremity, God’s Opportunity”、訳せば「人間の危機は、神の好機である」。要するに、私たち人間が弱さを感じさせられる時こそ、そこに神の力が強く働いて下さるのです。ゆえに、パウロは、続く 10 節の最後でこう述べているのではないのでしょうか？「私が弱いときにこそ、私は強い」と。

シドニー・オリンピックの女子マラソンで、日本人として初の金メダルを獲得したQちゃんこと、高橋尚子選手の強さの秘訣について問われた小出監督はこう答えています。「Qちゃんの強さの秘訣かい、それはね、彼女の弱音だよ！」と。高橋選手の監督・コーチ陣は吐露された、彼女の弱音や不安を即座に分析し、どこを強化すべきか、適切に対応できたのでした。つまり、彼女の弱さこそが強さの出発点になったのです。

私たちキリスト者には、靈的“弱音”としての祈りがあるのではないのでしょうか？

日々の歩みにヘブンリー・ビューを！

「神の御目が人の道の上にあり、その歩みをすべて見ているからだ。」

(ヨブ記 34 章 21 節)

新緑の大変美しい五月になりました。しかし、この五月は、いわゆる「五月病」が発症する時期でもあります。ある意味、環境の変化によって自分自身を見失ってしまったり、休みの終わりによって不安になったり、生きる目標を見失ってしまうということがあるのではないのでしょうか？

そのような際、まず必要なことは、私たちを目的を持って創造され、私たちを愛をもって見守って下さっている神様をこそ、しっかりと見上げることではないかと思います。箴言 3 章 6 節にはこうあります。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」

主なる神様をこそ見上げ、そんな神様の視点から、自分自身の歩みを見詰め直してみるのです。そうする時に、それまで見えなかった周囲の状況や進むべき方向が見えてくるのではないのでしょうか？

ちなみに、そういう視点を「ヘリコプター・ビュー」と言うそうです。おそらく今は「ドローン・ビュー」と言った方が適切かもしれません。霊的、信仰的には、神様の視点、天からの視野という意味で「ヘブンリー・ビュー」と言えましょう。

私たちは、五月病など、人生に行き詰まった時、一旦立ち止まり、「ヘブンリー・ビュー」で天を見上げ、神様の視点から自分自身を見詰め直してみましょう。その際、より広い視野によって周囲や進むべき方向が見えてくるだけでなく、あなたを見守っていて下さる、神様の愛溢れる眼差しを感じる事ができるのではないのでしょうか？



カイザルのものはカイザルに、

神のものは神に返しなさい！

「イエスはそのたくらみを見抜いて彼らに言われた。『デナリ銀貨をわたしに見せなさい。これはだれの肖像ですか。だれの銘ですか。』彼らは、『カイザルのです。』と言った。すると彼らに言われた。『では、カイザルのものはカイザルに返しなさい。そして神のものは神に返しなさい。』」  
(ルカの福音書 20 章 23～25 節)

主イエスは、デナリ銀貨を見せ、そこにカイザルの肖像が刻まれているのを確認させつつ、「カイザルのものはカイザルに返しなさい」と言われました。ある意味、キリスト者として、納税に限らず、地上に生活する者として、その社会的な責任を果たす必要がある、ということなのではないでしょうか？証しを立てる意味でも・・・。

ただ、その社会的な責任、「カイザルのものはカイザルに返」すことが、信仰に反する場合は、その限りではありません。むしろ、「人に従うより、神の従うべきです」(使徒 5:29)の原則が適用されるべきです。つまり、本題である「神のものは神に返しなさい」が優先されるでしょう。

ところで、主イエスは「神のものは神に返」すことに関して、創世記 1:27 「神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。」を念頭に置かれていたように思います。ちなみに、「神のかたち」とはラテン語で“イマゴー・デイ”。「神の似姿、神の似像」とも訳し得る言葉です。つまり、私たち人間には、そんな「神のかたち」が刻まれているのです。ゆえに、私たちキリスト者は、「神のもの」と言えましょう。そんな「神のもの」としての自分自身を、私たちは私物化していいのでしょうか？ いや、神にお返し(=献身)すべきです！

改めて、復活信仰を！

「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。』」（ヨハネの福音書 11 章 25 節）

先日、ローマ・カトリック教会のフランシスコ教皇が亡くなりました。直前の復活祭のミサには参列し、メッセージも述べていましたので、多くのカトリック教徒の方々は突然の訃報に驚き悲しまれていることと思います。

ところで、ローマ教皇の逝去は、私たちに一つの大切なメッセージを投げ掛けているのではないのでしょうか？それは、すなわち、ラテン語の“メメント・モリ”、つまり、「(汝の)死を覚えよ」とのメッセージです。

人は、どんなに立派でも、いくら長命でも、基本的に、一度、この地上生涯を閉じることになります。ローマ教皇でさえも、神の時が来れば、亡くなるのです。私たちも同じではないのでしょうか？「散る桜、残る桜も、散る桜」とはよく詠ったものです。

そして、私たちは、自らの死を覚える、つまり、積極的な意味で死を意識すると同時に、しっかりとそんな死に備えていくことが求められているのではないのでしょうか？言うなれば、究極の“終活”です。

この点、キリスト者は、改めて復活信仰に生きることによって、それが可能となるのではないのでしょうか？つまり、上掲のみことばにありますように、「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです」との主の言葉を心から信じ、受け留めつつ、与えられた人生、残された人生を、希望を持って生きるのです。

終着駅は始発駅。この地上生涯の終わりである死は決して一巻の終わりではありません。その終着駅は確実に主と共なる新しい生、永遠のいのちの始発駅になるのです！

見えないものを確信し、目の前の小事に励む

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」  
(ヘブル人への手紙 11 章 1 節)

その昔、ある一人の男性が、シャルトル大聖堂の建設現場を訪れました。まだ完成には程遠い状況でしたが、何人かの者たちが忙しそうに働いています。男性はふと立ち止まり、黙々と石を叩いている職人に声をかけました。「あなたは何をしているのですか?」。すると彼は、振り返りもせずに言いました。「ご覧の通り、俺は石工として働いているのさ」。・・・旅の男性はさらに奥へと進みました。すると程なく綺麗なステンドグラスを造っている職人の姿が目飛び込んできました。男性は先程と同じ質問を投げ掛けてみました。「あなたは何をしているのですか?」。返ってきた答えは「わしはガラスを吹いて、生計を立てているのさ」というものでした。・・・そんな中、建設現場も夕暮れ時を迎えました。男性は帰り際に、建設現場で出た木屑や石やガラスの破片を履いている一人の年老いた掃除婦を目にします。おおよそ答えは予測されましたが、念のため、前二人にしたのと同じ問いを投げかけてみました。「あなたは何をしているのですか?」。すると、彼女は履いていた箒を立てて、そこに手を置き、天を見上げて、こう言ったのです。「あたしかい、あたしゃ、多くの人々が心から神を礼拝できるように、ここに世界一の大聖堂を建て上げているのさ」。この老婦人は決して「あたしゃ、何もできない老人だよ」などとは言わなかったのです。まだ、現実には見えていないシャルトル大聖堂を心の目で見上げつつ、自分の役割とその働きの意味を、その信仰のうちにしっかりと噛み締めていたのではないのでしょうか?

ぜひ、私たちキリスト者も、この老婦人の信仰の姿勢に倣いたいものです!

## “三流”に生きる

「イエスは涙を流された。」（ヨハネの福音書 11 章 35 節）

多くの人は、一流大学への入学や一流企業への就職を目指していることでしょう。しかしながら、我らの主イエス・キリストは、そんな一流ではなく、なんと「三流」を目指し、現実「三流」に生きたのです。

ちなみに、この場合の「三流」とは、一流でないという意味ではありません。そうではなく、主イエス・キリストが、私たちのために三つのものを流して下さったという意味において、「三流」なのです。

第一に、主は私たちのために汗を流して下さいました。宣教や癒しなど、多くの目に見える具体的な働きをして下さったのです。弟子の足も洗いました。

そして、第二に、上掲の聖句にありますように、主は涙を流して下さいました。「主イエスは涙を流された」とは、聖書で最も短い一節の一つとして有名ですが、主はまさに悲しむ者と共に悲しみ、泣く者と共に泣いて下さったのです。

さらに、第三に、主は血を流して下さいました。すなわち、ゲッセマネで血の汗を流したのみならず、十字架上で私たちの身代わり、罪の贖いのために、大いなる犠牲の血を流して下さいました。血を流すことなしに、罪の赦しはあり得ない。

願わくは、私たちもそんな主イエスの愛に応答し、また、主の歩みに倣って、三流クリスチャンを目指そうではないでしょうか？すなわち、まず、第一に、具体的な奉仕を分かち合い、共に汗を流す。第二に、他の兄弟姉妹、そして、世界にも目を向けて、共に喜びと悲しみの涙を流す。さらには、第三に、他者のために血を流す、つまり、場合によっては、自らが犠牲を払うということをして参りましょう。

渡らねばならない向こう岸

「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう。』と言われた。」  
(マルコの福音書 4 章 35 節)

誰にでも、渡らねばならない“向こう岸”があります。人によっては、それは受験であるかもしれませんが、就職や結婚であるかもしれません。仕事上の、あるいは、プライベートな、何か大きな決断や挑戦(チャレンジ)であるかもしれません。そして、私たちが渡らねばならない“向こう岸”の最たるものは、私たちの地上生涯の終わりである<死>ではないでしょうか？

ちなみに、聖書の出来事(物語)は往々にして、夜(夕方)から始まります。ある意味、試練の夜から何かが始まるということなのかもしれません。そう、主なる神は、私たちの夜(夕方)、つまり、試練においてこそ、力強く働いて下さるのではないのでしょうか？・・・考えてみて下さい。「夕があり、朝があった」がキーワードの天地創造において、主なる神は、茫漠とした暗闇に希望の《光》を創造して下さったのです！

こんな言葉があります。「嵐の数だけ祈りがあり、祈りの数だけ主の助けがある」。確かに、私たちの人生には、夜の嵐、すなわち、試練の時があります。しかしながら、私たちはその度に、祈りを通して、私という舟に、あなたという舟に、救い主イエス・キリストが同船して下さることを思い出すことができるのではないのでしょうか？

そして、そんな私たちの舟に常に同船する主は、「黙れ、静まれ」という一言のもとに、私たちの心の嵐を鎮め、大なぎへと変えて下さるのです。必要に応え、私たちの最善をこそ為して下さいなのです。たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても・・・

環境が変わるこの時期、なおさら主の同船を覚えましょう。シャローム(平安あれ)！

感謝・感激・恩送り！

「ところがザアカイは立って、主に言った。『主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。』  
(ルカの福音書 19 章 8 節)

ザアカイの話を思い出して下さい。彼は誰に満たされ、誰に愛され、誰に救われたのでしょうか？・・・言うまでもなく、主イエス・キリストによつてです。でも、上掲の聖句をよく見てみて下さい。ザアカイはそんな主に感謝を示すどころか、自分の財産の半分を貧民に施し、不正の被害者には四倍の賠償をすと言っているのです。

そう、つまり、ザアカイは主の愛、主の救いに対して、その感謝を、直接、主イエスへ向けるのではなく、それをむしろ、貧しい人たちや自分がだまし人々へ向けているのです。これを“恩返し”に対して、＜恩送り＞と言います。英語では“ペイ・フォワード”。すなわち、「前に払う」。誰かから受けた恵みへの恩を、それを下さった人にではなく、別の誰かに差し出すということです。

今から三十五年程前、アメリカに留学していた私は、あるコーヒー・ショップでコーヒーを買うべく代金をレジで支払おうとしたところ、店員さんから数人前のお客様が私の分まで支払って帰って行ったので、お代は結構ですと云われたことがあります。おそらく代金を払ってくれたその人は何かいいことがあって、まさに、その感謝を、あふれる喜びを“ペイ・フォワード”、＜恩送り＞したのではないのでしょうか？私はその恩恵に与ったのです。

主は「・・・わたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25 章 40 節)と、私たちに＜恩送り＞を期待しているのです！

## メメント・モリ（死を覚えよ）

「天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。…」

（伝道者の書3章1～2節前半）

「けれども、私たちの国籍は天にあります。…」

（ピリピ人への手紙3章20節前半）

聖書は、何事にも神の定め給いし時がある、ということです。とくに、人の生死におきましては、私たちの思いの遠く及ばない、最も深いところに、人知を越えた神の時があるということなのではないでしょうか？

と同時に、人には若かろうが、年老いていようが、地上生涯の終わり、死はほぼ必ずやって来るということです。携挙(存命中の主の再臨)の可能性を除けば、人間の死亡率は100%です。それゆえ、いつ来るか分からない、そんな死においてこそ、究極の備えが必要なのではないのでしょうか？・・・備えあれば、憂いなし！

ところで、中世ヨーロッパの修道士たちはラテン語で「メメント・モリ」という言葉を合言葉とし、互いに呼びかけ合っていました。「メメント・モリ」、その意味するところは「(汝の)死を覚えよ」です。彼らは人の一生には限りがあることをしっかりと自覚して、積極的な意味で自らの死を意識し合ったのではないのでしょうか？そうして、与えられた命を精一杯生きる、より濃密な生を生きることを誓い合ったのでした。

先に天に召された兄弟姉妹の召天は、私たち一人一人にそんな「メメント・モリ」、「(汝の)死を覚えよ」という問いを投げかけているのではないのでしょうか？そして、もう一点、ここで絶対に忘れてはならないことは、そんな死は決して終わりではないということです・・・「終着駅は始発駅」、天に国籍を持つキリスト者にとって、死(召天)は地上生涯の「終着駅」であると同時に、永遠の命の「始発駅」なのです！

讃美を住まいとされるお方に、天国の讃美を！

「けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。」

(詩篇 22 篇 3 節)

礼拝には讃美が付き物です。讃美のない礼拝は礼拝とは言えないかもしれません。それほど、礼拝において讃美は大切なものなのではないでしょうか？

上掲の聖句には、主なる神は「イスラエルの賛美を住まいと」されるとあります。これを現代に適用するならば、主なる神は私たちキリスト者の讃美を喜ばれ、そこに臨在されるということではないでしょうか？・・・ぜひとも、主に喜ばれ、神の臨在を感じさせる讃美を、それこそ、主なる神様におささげしたいものです。

神へのささげものですから、いい加減な気持ちで讃美することはよくありません。その意味において、「とりあえず讃美でも」というような、“とりあえず讃美”、“でも讃美”は禁句といたしましょう。

と同時に、あまりにも音楽(芸術)性を追求し過ぎたり、技術偏重になることも考えものです。素晴らしい讃美をささげることは大切ですが、そこに喜びや感謝、悔い改めや希望がないとしたら、心がこもっていないとしたら、本末転倒でしょう。

しばらく前になりますが、かつて御茶の水で礼拝していたアメリカ人ファミリーが帰米し、地元の教会で、ご主人が讃美リードの奉仕をしたそうです。その際に、御茶の水での讃美をこう証ししたというのです・・・「あの教会では、日本語と英語が混じり合う讃美がなされており、最初はその不協和音に戸惑った。けれども、その後、あの讃美を思い出す度に、あれは国境や言語文化の違いを越えた、まさに、天国での讃美ではないかと思うようになった。」と。さあ、今日も天国の讃美をささげましょう！



ありがとう…いつでも、どこでも、誰にでも！

[2025 年度 教会学校 年間テーマ]

「…感謝の心を持つ人になりなさい。」(コロサイ人への手紙 3 章 15 節) [CS 聖句]

さて、本日、3 月 9 日が<何の日>だかご存知でしょうか？・・・実は、日本では 3 と 9 の語呂合わせから、サンキュー、すなわち、「感謝(ありがとう)の日」だそうです。今日に限らず、願わくは、「いつでも、どこでも、誰にでも」、「ありがとう」という「感謝の心を持つ人」になりたいものです。

ところで、今年 2025 年の御茶の水キリストの教会の年間テーマは、言わずと知れた「感謝」(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16～18 節)です。それに関連して、当教会の教会学校では、新年度のテーマを「ありがとう…いつでも、どこでも、誰にでも！」とし、テーマ聖句を上掲の「…感謝の心を持つ人になりなさい」(コロサイ人への手紙 3 章 15 節)とすることになりました。ぜひ、このことも覚えておいて下さい。

ある意味、子供たちは、私たち大人の背中を観て育ちます。私たちが不平不満に生きていれば、子供たちも不平不満に生きることになるでしょう。逆に、私たちが主にあつて、「いつでも、どこでも、誰にでも」、「ありがとう」という「感謝の心を持つ人」になっていければ、子供たちもそのように育ってくれるのではないのでしょうか？

ぜひ、教会学校教師のみならず、私たち教会全体で教会学校の子供たちのために祈り、子供たちの良き模範として、「感謝の心を持つ人」にならせていただきましょう。

アメリカの牧師 / 教育者ウィリアム・アーサー・ワードの言葉・・・「平凡な教師はただしゃべる。良い教師は説明する。優れた教師は模範を示す。そして、偉大な教師は生徒の心に火をつける。」。まず、主が私たちの心へ感謝の点火をして下さいます！

「地上では旅人」のスタンスを！

「これらの人々はみな・・・地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。・・・事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。・・・」

(へブル人への手紙 11 章 13…16 節)

さて、私たちの人生のスタンス、信仰生活のスタンスは、一体、どのようなものでしょうか？もちろん、キリスト者ですから、この地上生涯に嚙(かじ)り付くというようなものでは決してないと思います。しかしながら、だからと言って、上掲のみことばのように、天をこそ真の故郷として、地上では旅人であるというスタンスに必ずしも立ち切れていないのが現状ではないでしょうか？

願わくば、少しでも、真の故郷である天の御国、永遠のいのちを先取りし、「地上では旅人」のスタンスに立っていきたいと思います。そして、そのためには、地上における神の国(支配)を垣間見、実感できる教会生活を通して、兄弟姉妹と共に、真の故郷である天の御国をしっかりと覚え、「私たちの国籍は天にあります」(ピリピ人への手紙 3 章 20 節)と確信していくことが求められているのではないのでしょうか？

イメージしてみてください。スコールのような急なにわか雨が降ってきたとしても、庭に干してある洗濯物を取りに行くのではないのでしょうか？なぜなら、仮にびしょ濡れになっても、きれいなシャワーやふかふかのタオルが備えられた家があるからです。

「良い港があるからこそ、人は冒険的な航海に出ることができる」と言われます。私たちキリスト者がリアリティをもって、真の故郷である天の御国を待ち望むことができれば、この地上生涯における、それなりに大変な困難をも何とか乗り越えることができる(⇒参照: コリント人への手紙第一 10 章 13 節)のではないのでしょうか？

真理がわれらを自由にする

「そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」  
(ヨハネの福音書8章32節)

上掲の聖句は、その人称が「あなたがた」の二人称複数形から「われら」の一人称複数形へと変えられて、かの国立国会図書館法の前文に記され、国会図書館のカウンターの上にギリシア語と日本語で刻まれています。「真理がわれらを自由にする」と。

「真理がわれらを自由にする」。ところで、蔵書数日本一の国立国会図書館に、どうして、聖書由来のこの言葉が書かれ、掲げられているのでしょうか？・・・実は、この言葉を選んだのは、羽仁五郎という歴史家・歴史学者です。キリスト教学校でもある自由学園や婦人之友社を創立した、日本の女性ジャーナリストの先駆けである羽仁もと子の義理の息子に当たります。

そんな羽仁五郎は、次のように述べています。「この言葉が、将来ながくわが国立国会図書館の正面に銘記され、無知によって日本国民が奴隷とされた時代を永久に批判するであろうことを、ぼくは希望する」と。国立国会図書館は戦後比較的すぐに設立されましたので、二度と愚かな戦争を起こさないために、国立国会図書館を、フェイクではなく、真理・真実を知る場所にしようとしたのではないのでしょうか？

私たちは優れた本を通して、真理・真実を見極める眼が養われ、上から言われたことをただ鵜呑みにしたり、盲従するのではなく、いい意味でそれを批判的に考え、真の意味で自由に行動することができるのではないのでしょうか？…最も優れた本、それは神の言葉としての聖書です！

## 飲水思源

「キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおりの信仰を堅くし、あふれるばかり感謝しなさい。」

(コロサイ人への手紙2章7節)

茨城キリスト教学園のキャンパスの隅に、ひっそりと佇む洋館があります。

「モアヘッド記念館」と呼ばれる建物で、現在は学園のゲスト・ハウスとして使用されています。そんな「モアヘッド記念館」にその名を冠する宣教師 B. D. モアヘッドが来日して、くしくも今年 2025 年でちょうど 100 年になるのです。

ちなみに、「モアヘッド記念館」は元来、常陸太田市に建てられた宣教師住宅でした。最初に、上述した B. D. モアヘッド宣教師家族が、続いてハリー & ローガン・ファックス兄弟の父親である H. R. ファックス Sr. 宣教師家族が、そして、御茶の水の O. D. ビクスラー宣教師家族が、やがて、繁國良八伝道者家族が住んだようです。その後、その建物は学園に移築され、ローガン・ファックス先生家族が住んだ後、短期大学の家政科“実習館”として使用されてきました。現在は前述のように、学園のゲストハウスとして使われています。・・・そこにはまさに多くの働き人たちが居たのです！

ところで、中国の故事成句の一つに「飲水思源」という四字熟語があります。読んで字の如く、水を飲んだなら、その源である井戸を掘ってくれた人の働きを思い巡らしつつ感謝しなさい、との意味です。北周の詩人・庾信による『徵調曲』に由来すると言います。

現在の日本の「キリストの諸教会」があるのは、主なる神様のご恩寵のもと、既述した宣教師のみならず、日本人クリスチャンも含めて、多くのキリスト者の先達たちのご愛労があったからこそではないでしょうか？ぜひ、「飲水思源」したいものです！

愛のとりなしを、わずかでも！

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。」  
(ヨハネの福音書 15 章 12 節)

まもなく、いわゆるバレンタインデーです。日本では世界の中では珍しく、女性が男性に、しかもチョコレートを贈る日とされています。一説によると、これはある日本の菓子メーカーの販売戦略だとか・・・。

諸説ありますが、おおよそ次のような逸話に基づくようです・・・紀元3世紀頃、時のローマ皇帝・クラウディウス二世は、若者が出征を拒否したり、戦地で士気が下がる最たる理由を、恋人や妻を故郷に残す(している)ことへの躊躇(喪失感)にあると決め付け、なんと結婚や恋愛自体を禁止してしまいました。そんな中、悲しむ若者たちのために、司祭のウァレンティヌス(=バレンタイン)はひそかに愛し合う者たちの結婚式を執り行なったのです。それに激怒した皇帝は、やがてウァレンティヌスを処刑。その処刑日が結婚の守護女神ユーノーの祝日である2月14日でした。以降、毎年そんな2月14日には、ウァレンティヌスを偲びつつ、愛する者たちがその愛を告白し合ったという訳です。ある意味、ウァレンティヌスは、大きな犠牲を払って、愛する者たちへの“愛のとりなし”をしたと言えるのではないのでしょうか？

私たちには、究極の“愛のとりなし”手としての主イエス・キリストがいて下さいます。そんなキリストの“愛のとりなし”に感謝し応答しつつ、今度は私たちが誰かの“愛のとりなし”を、たとえわずかであってもさせていたしましょう。

このバレンタインデー、高価な義理チョコのために高額を払うよりも、高価で尊い誰かのために“愛のとりなし”をこそしていこうではありませんか？チョコっつでも!?

## 五時から男/女への福音 ～聖なる逆転～

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

上掲の聖句は、マタイの福音書 20 章前半に記されている「ぶどう園の労務者のたとえ」の最後に記されている言葉です。一番最後に来て、わずか一時間しか働かなかった、いわゆる“五時から男”が、予想に反して、一番最初に、しかも一日の労働賃金をもらったという結末にあっと驚く間もなく、その言葉は響くのです。「あとの者が先にな」る！と。実はこれが、恵みの世界の醍醐味である＜聖なる逆転＞なのです。

「大逆転は、起こりうる。わたしは、その言葉を信じない。どうせ奇跡なんて起こらない。それでも人々は無責任に言うだろう。小さな者でも大きな相手に立ち向かえ。誰とも違う発想や工夫を駆使して闘え。今こそ自分を貫くときだ。しかし、そんな考え方は馬鹿げている。勝ち目のない勝負はあきらめるのが賢明だ。わたしはただ、為す術もなく押し込まれる。土俵際、もはや絶体絶命。」

この文章を“逆転”させて、最後から読み直してみましょう。こうなります。↓

「土俵際、もはや絶体絶命。わたしはただ、為す術もなく押し込まれる。勝ち目のない勝負はあきらめるのが賢明だ。しかし、そんな考え方は馬鹿げている。今こそ自分を貫くときだ。誰とも違う発想や工夫を駆使して闘え。小さな者でも大きな相手に立ち向かえ。それでも人々は無責任に言うだろう。どうせ奇跡なんて起こらない。わたしは、その言葉を信じない。大逆転は、起こりうる。」

そう、恵みの世界においては、救いの“大逆転”は起き得るのです！そのためには、私たちの発想にも逆転が必要です。私たちは皆、五時から男/女なのだという・・・。

「絶えず祈」るために！

「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして祈ってください。」  
(ローマ人への手紙 15 章 30 節)

今年の年間テーマ聖句(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16～18 節)の中で、パウロは「絶えず祈りなさい」と勧めています。しかしながら、私たちキリスト者は、はたして絶えず祈ることなんてできるのでしょうか？

その一つの可能性として、自分がひとり祈るだけでなく、他の誰かにも共に祈ってもらうという“とりなしの祈り”による祈りの輪というものがあるのではないのでしょうか？それならば、仮に、自分が祈れない時、あるいは祈っていない時にも、誰かが祈ってくれていることによって、「絶えず祈」ることができるのではないかと思います。

聖書をよく読んでみますと、あの偉大な信仰者であるパウロも、上掲の聖句にありますように、度々、“とりなしの祈り”を要請しているのです。ちなみに、上掲の聖句以外では、エペソ人への手紙 6 章 19 節、同 6 章 20 節、コロサイ人への手紙 4 章 3 節、同 4 章 4 節、テサロニケ人への手紙第一 5 章 25 節、テサロニケ人への手紙第二 3 章 1 節で、パウロは“とりなしの祈り”を要請しております。

「祈りはクリスチャンにとって霊的な呼吸である」と言われますが、それは祈りが信仰生活にとって自然な営みであると共に必要不可欠なものであることを述べています。呼吸をしなければ生きていけません。自ら祈るだけでなく、ぜひ誰かに共に祈ってもらいましょう。「絶えず祈」るためには、祈ってもらうことが欠かせないのです！

「いつも喜んでい」られるか？

「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」

(ピリピ人への手紙 4 章 4 節)

今年の聖句(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16～18 節)の冒頭で「いつも喜んでいなさい」と勧められています。はたして、私たちは「いつも」喜んでいることが可能なのでしょうか？正直、難しいと言わざるを得ません。

ただ、“喜び”とは何なのかをいつも考えることは大切なのではないのでしょうか？そうすることで、いつしかその悲しみが“喜び”へと変えられるかもしれないからです。

ある方は言いました。「楽しみは外から入って来て一時的である一方、喜びは内から湧いて来て永続するものだ」と。例えば、誰かからディズニー・リゾートの招待券をもらって、ディズニー・リゾートに行くことは、大いに楽しみです。ただ、多少とも思い出は残るものの、その楽しみはいつしか消え去るのではないのでしょうか？

それに対して、真の喜びは、あたかも自噴する温泉のように、私たちの内側から湧き上がり、それはこんこんと湧き続けるというのです。まさに、私たちキリスト者に与えられている救いの喜びとはそういうものなのではないのでしょうか？

悲しみを感じている時に、ふと救いの喜びを思い出す瞬間、ほのかな喜び、いや、あふれる喜びが湧いて来ることがあるのではないのでしょうか？主にあって全ての罪は赦され、たとえ死んでも生きる、既に天に国籍をいただいているのです！

だからこそ上掲の聖句の如く、自由のない獄中(もしくは軟禁状態)にあって、使徒パウロは、内から湧き上がるその救いの喜びによって、自ら究極の喜びに浸り、かつ私たち(聖書の読者)にいつも喜ぶことを勧められるのではないのでしょうか？



みことばの受肉を！

「幸いなことよ。悪者のはかりごとに歩まず、罪人の道に立たず、あざける者の座に着かなかつた、その人。まことに、その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようにだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」  
(詩篇 1 篇 1～3 節)

「ヨハネのクリスマス」とも言われるヨハネの福音書 1 章 14 節の冒頭には「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた」とあります。ここは一般的に、神が人となるという、いわゆる“神の受肉”を述べていると解されます。ちなみに、原語のギリシア語では“ホー・ロゴス サルクス エゲネトー”となっており、直訳すれば「その言葉は 肉と なった」という意味です。神の受肉において「言葉(ロゴス)」で表現されている神が肉(=人としての肉体)を取られたように、私たちも神の言葉としての聖書のみことばを、私たちの信仰生活において、血となし肉とする、つまり具現化する必要があるのではないのでしょうか？私はそれを、私たちキリスト者における「みことばの受肉」と呼びたいと思います。

上掲のみことば、すなわち、詩篇 1 篇 1～3 節は、まさに、そういう意味での「みことばの受肉」を述べているのではないのでしょうか？「・・・その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ。その人は、水路のそばに植わった木のようにだ。時が来ると実がなり、その葉は枯れない。その人は、何をしても栄える。」

ぜひ、この新しい一年、主のみことば、聖書の言葉を喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさみつつ、心に蓄え満たされて、水路のそばに植わった木のように、霊的に生き生きとみことば(ガラテヤ 5:22～23)に示された御霊の実を実らせたいものです。

感謝の秘訣 よ〜く考えてみよう！〜

「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。」

(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16〜18 節)

今年の御茶の水キリストの教会の年間テーマは、上掲の聖句(テサロニケ人への手紙第一 5 章 16〜18 節)より「感謝」となります。併せて、「喜び」と「祈り」も覚えたいと思います。そこで、以下の三つの四文字熟語をサブテーマといたしましょう。

常時喜悅 不断祈祷 万事感謝

ところで、今年のテーマ聖句の最後で、パウロは「すべての事について、感謝しなさい」と言っています。はたして、すべての事を感謝することなど、可能なのでしょうか？なぜなら、すべての事には、おそらく、必ずしも自分にとって嬉しくないことも含まれているからです。

しかしながら、よ〜く考えてみて下さい。一見、自分に嬉しくない、喜ばしくないと思っていたことが、結果的には、自分の益になっているということがあるのではないのでしょうか？神は時にかなって万事を益として下さるのです。(⇒伝道者の書 3 章 11 節、ローマ人への手紙 8 章 28 節)

哲学者のハイデガーは、英語(ドイツ語)で「考える」を意味する **think (denken)** と「感謝する」を意味する **thank (danken)** は同じだと述べています。つまり、私たちは物事をよ〜く「考える」ことをしていく時に、マイナスにもプラスが見えてきたりして、「感謝する」思いが沸々と芽生えて来るということなのではないのでしょうか？